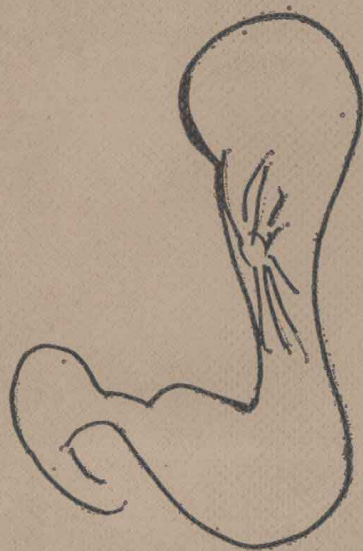


色 部 春 夫 著

胃袋と切り



医 療 図 書 出 版 社 刊

色 部 春 夫 著

胃袋と切り。

医 療 図 書 出 版 社 刊

一九六九年五月五日 発行

胃袋を切る

頒価 三〇〇円

〒 七〇円

著 者 色 部 春 夫

発行者 安 藤 萌 生

印刷所 滝 沢 印 刷 所

発行所 株式会社医療図書出版社

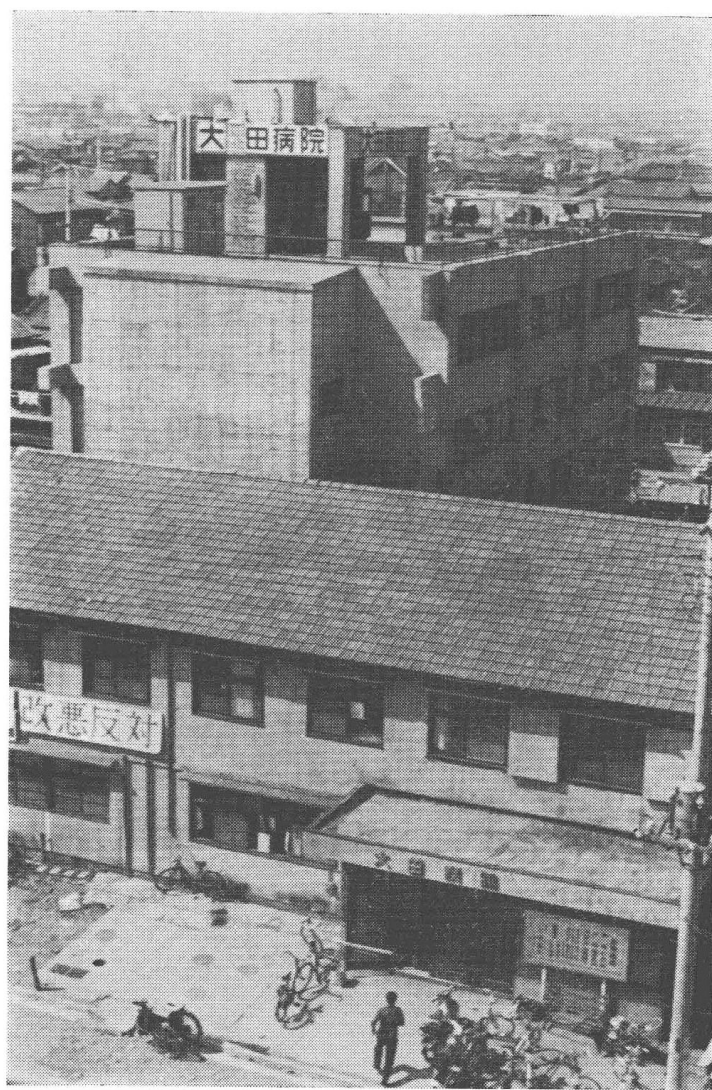
東京都中野区江原町一―二二―二〇

TEL (九五二) 〇 六 一 一

振替 東京 四 三 三 〇 六 番



著者近影



大田病院全景（東産信用金庫屋上から）



ハノイで「日本の医療事情」
について報告する著者

まえがき

二月十六日で、私は満五十五才になった。停年退職の年である。結婚したのは、昭和十四年五月七日であるから、今年で結婚生活満三十年ということになる。いづれにしても人生のひと区切りである。五十余年の歳月は、必ずしも平担ではなかった。いや私なりに波瀾にみちた歳月であったと思っている。協道にもそれたし、躓いて転びもしたが、一時の休みもなくひた走りに走り続けて来た。

はからずも、私は昨年十二月胃袋を全摘するという大手術をうける破目になった。そしてすでに、三カ月あまり療養生活を送っている。夢中で走り続けて来た過去を、私はあらためて想いかえしている。どうしても悔悟と反省がさきだつのである。私は、家族や近親者は言うまでもなく、多くの友人知己、そして私が属するさまざまな組織から、援助と激励をうけて、ようやく立ち直る自信を持てるようになった。これらの支えがなかったら、私は孤独と停滞のなかにおちこんでしまったであらう。反省と自戒は、これからの私の活動にとっての糧である。その意味で、こ

のたびの療養生活もまた無駄ではなかったと思つてゐる。

この小冊子に集録したものは、過去あちこちに書きとどめたもののなかから、いくつかに選んでまとめたものである。もとより、大方の評価にたえるものではない。言ってみれば、自らの慰みにすぎない。ただ私としては、冒頭にのべたように、満五十五才、結婚生活三十年というのは、私の生涯の一つの区切りであることはまちがいない。療養生活のすさびに、自らの足跡を記録にとどめようと思ひつた。著者の意を汲んで一顧を賜れば、望外の幸せというものである。

なお、この小冊子を出版するにあたって「健康会議」の安藤萌生、田村幸治両氏に多大なご援助をいただいた。記して感謝の意を表する。

一九六九年三月

目次

まえがき	4
I 胃袋を切る	9
(一) 手術	10
(二) 回復室	15
(三) 排気	24
(四) 絶食	28
II 大都会の辺地から	34
おかみさんといっしょに	35
森ヶ崎界限	42
公害……都会の憂鬱	49
乳児保育所建設記	55
III 地域社会と病院	65

IV	開業医 I 氏の生活と意見	76
----	---------------	----

	流 感 往 診	77
--	---------	----

	商売さまざま	81
--	--------	----

V	わが青春の足跡 わが青春に悔いなしと誰がいえようか	84
---	---------------------------	----

	なべやきうどん	86
--	---------	----

	日 記 帳	89
--	-------	----

	筑摩の森かげ	94
--	--------	----

	ある秀才の死	98
--	--------	----

	林真弓さんの結婚を祝う	101
--	-------------	-----

VI	春塵——小説	106
----	--------	-----

VII	たたかう人民のくにベトナム——ルポルタージュ	123
-----	------------------------	-----

	若い公安官	123
--	-------	-----

	ハノイの表情	128
--	--------	-----

	タイン・ホア省の女民兵たち	134
--	---------------	-----

	フアム・ゴク・タク先生とその周辺	144
--	------------------	-----

VII

終りに 149

ファム・ゴク・タク先生を悼む 151

附―夫を語る 155

一、きょうだいのよう 156

二、「いやなひと」と思ったが 159

以上

I 胃袋を切る



病床にて，家族とともに

一、手術

十二月十七日、手術の日である。

十二日に入院したときから、今日の手術は予定されていた。術前の諸検査は、正味五日の間に手順よく実施されていた。前日の昼食以后何も食べていない。午後三時ヒマシ油服用、午後七時高圧浣腸、夜はセルシン〇・五〇を服用して良眠した。すべては順調にスケジュール通りに進化した。執刀は午前十時三十分、九時四十分には病室を出ることになっている。

思えば目まぐるしい十日間であった。文字通り急転直下である。いま私は静かに「その時」を待っている。格別の不安はない。併し全くないと言ったらうそである。なまじ医者であるだけに、最悪の事態を思わぬでもない。

はたして潰瘍だけか、悪性の変化がありはしないか、という不安は、終始私の頭のある領域を占めてはなれない。

頭は冷くさえていた。基礎麻酔の注射をされてから三十分以上はたつが、ねむくもだるくもない。

家族が来ている。そして、この病院を紹介し、高名なN教授に引きあわせて下さったI先生、K病院のM先生、Y病院のN先生らが見えて、手術に立ち合つて下さるという。何よりの力づけである。

「あるけますよ」と言つたが、私は運搬車にのせられた。エレベーターで降りた。廊下をいく曲りかした。私は、もう眼をつむつたまま静かに呼吸をしていた。

すべては、私自身の意志のとどこかないところで動いている。ちょうど、ベルトコンベアーに乗せられたようなものだ。早くもないスピードで、コンベアはずっとむこうまでなめらかに動いている。準備室、手術室、そして回復室――いや私自身の生涯の終りままで動いているのかもしれない。いまじたばたしたところでどうなるものでない。私としては、ベルトコンベアが遅滞なく動いてくれること、その場、その場で阻礙なく作業が行なわれること――ただそれだけを願ひ信ずるのみである。

運搬車は輪を軋ませて左手に回つた。私はそこで着ていた私服を一切ぬがされ、病院の病衣に着かえさせられた。眼鏡と義歯は、すでに病室を出る時に置いてきた。私は眼を被われた。ドアが開いた気配がして運搬車は隣の部室に引き込まれた。そして、私は軽々と手術台の上に移された。

「M先生の手術の進行具合をみて、麻酔に入ります。」麻酔科主任のH先生の声である。やが

て左下腿に注射針がさされた。点滴が始められたのであろう。

「さあ、ではいきましようか」

「規則正しく深く呼吸をして下さい。」

私の鼻と口はマスクでふさがれた。甘ずっぱい刺激性のガスが、私の気道に吸いこまれて行った。五呼吸くらいしたのであろうか。私は、私の体が軽くなって宙に浮いたように感じた。

「少しひんばんに呼吸して下さい」

声は遠い電話口から呼んでいるようだった。私は、けんめいに、そして意識的に呼吸をした。ガスの刺激が強くなった。軽くなった私の体は、速い速度で煙霧のなかに吸いこまれて行くようであった。次の瞬間私は、私の意識を完全に失っていた。

白い霧の中を泳いでいるような感じであった。ときどき、白い霧は、弱い照明をあてたように、うすい紫色になったり茜色になったりした。体はどしりと重かった。背と腰が板のように硬くいたかった。そして腹にツキンと刺すような痛みを感じた。

「わたしはたしかにここにいる」

私は私の存在をたしかめた。どこであるかわからない。周囲の様子はさだかに識別し難い。併し、私はたしかにここに生きている!!

「あー、そうだ、手術がすんだんだ!!」

私は、私の手を動かして、そつと腹のあたりに触れてみた。かすかな安らぎが私の全身を包んだ。そして私はまた眠りの中に引き込まれて行った。

私にとって、このように、手術はまことにあつてなく終った。後で聞いてみると手術時間は一時間半くらいかかっているようである。

術式そのものはそう簡単なものではなかったのだ。いや大手術にぞくする筈である。あの手術室のびーんとはりつめた緊張、いのちのかかっている巖しい寸分の誤りも許されぬ作業、――そういうものとは全く無縁に、私は眠っていたのである。私の眠っている間に、私の腹はさかれ、胃は切除され、腸がつながれていたのである。そのような大作業が、私の眠っている僅か一時間半ばかりの間に仕遂げられていたのであった。

意識がない、ということは何と安楽なことであろう。手術中、よしんば私はそのまま永遠に醒めないとしても、私自身は何の苦痛も悲しみも不安も恐怖もなかったのだ。とすれば、手術というもののへの不安と恐怖はいったい何なのだろうか。麻酔に入つたとたんに、意識は完全にはないのだ。腹をさかれようと、心臓がとまろうと、当の本人には全く意識されない。不安も恐怖もありようがない。私たちはただ未知のものの未体験のものへの恐怖不安に徒勞しているにすぎないのではないか。

併し、私の意識は次第によりがえりつつあった。私は私の存在を手さぐりにしろ確めないわけにはいかない。私は私の生命を自覚しないわけにはいかない。さだかに見わけのつかない意識のなかで、私は手術の終ったことに安堵した。そして同時に、手術が終ったからには、経過が順調にいつて、私の生命がゆるぎない足取りをとり戻すことを希求せずにはいられなかった。